

1586 年天正地震における「阿波の地割れ」の史的検討

興亜開発株式会社 中部支店*1 深沢 晋治*2

東濃地震科学研究所 木股文昭

Historical documents examination of "the ground crack of Awa"
in the 1586 Tensho Earthquake

Shinji FUKAZAWA Koa Kaihatsu Co., Ltd*3

Fumiaki KIMATA Tono Research Institute of Earthquake Science*4

■Abstract As the 1586 Tensho Earthquake was reported the serious disaster at the wide area from the Central to Western Japan, therefore, the earthquake is thought of the greatest inland earthquakes in Japan. In our article, we examined credibility on the disaster records on historical documents in Awa (present; Tokushima Prefecture) over 200km far from the Tensho Earthquake Faults. In the original document written in 1652 years, of reference document written in 1815 years, no earthquake ground cracks was reported. The reference should be a misuse the description on 1596 Keicho-Fushimi Earthquake. It is concluded that no serious disaster such as ground cracks occurred in Awa at the 1586 Tensho Earthquake. Keywords: 1586 Tensho Earthquake, Awa (present; Tokushima Prefecture), Awashi, Sanukinokuni-Oonikki, 1596 Keicho-Fushimi Earthquake.

■Keywords 1586 年天正地震、阿波の地割れ、阿波志、讃岐国大日記

1. はじめに

1586 年 1 月 18 日 (天正十三年十一月二十九日) の夜に発生した天正地震は、1891 年濃尾地震に匹敵する規模の陸域の大地震と考えられている。この地震を発生させた活断層として、養老 - 桑名 - 四日市断層帯、庄川断層帯、阿寺断層帯が候補に挙がっている。この地震に関連する被害地域は、東海地方を中心に北陸から近畿地方まで広範囲に及んでいることが史料や遺跡痕跡などから明らかにされている。

ところが、天正地震の規模や活動した活断層について研究者間でも統一した見解に達していない。宇佐美・他 (2013) は一つの地震とするが、飯田 (1987) は養老断層とその伊勢湾延長部の断層を震源とした地震以外に 2 日前の富山県砺波平野で被害を生じさせた地震も発生したと指摘する。最近では松浦 (2011) も「単独の地震では (中略) 震度分布を合理的に説明できない。」と複数の地震がほぼ同時期に発生したと考えている。

歴史地震では、その規模と震源は被害分布に基づく震度分布などから推定される。このため、天正地震が大地震だったことの傍証として四国徳島における地変も指摘されている [『増訂大日本地震史料第 1 巻』(1941), 宇佐美・他 (2013)]. 本論ではこの徳島 (阿波) での地変について複数の地方史料を通して、地変発生 の信憑性を検討する。

*1 〒468-0052 愛知県名古屋市中白区井口 2-407

*2 shinji.fukazawa@koa-kaihatsu.co.jp

*3 ADEP, 2-407, Iguchi, Tenpaku-ku, Nagoya, Aichi, 468-0052 Japan

*4 1-63 Yamanouchi Mizunami, Gifu, 509-6132 Japan

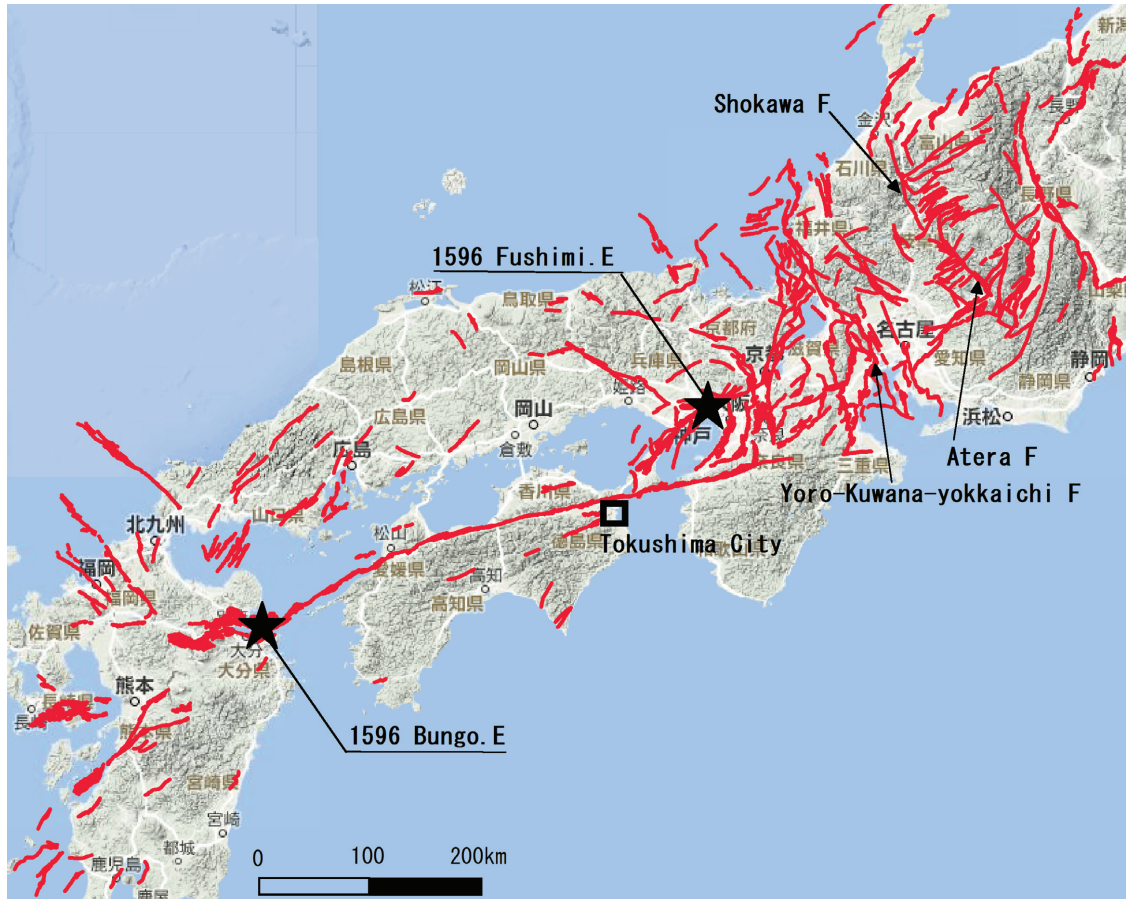


図1：1586年天正地震に関係する活断層と1596年慶長豊後地震、1596年慶長伏見地震の震央の位置（産業技術総合研究所，地質調査総合センター，地質図Naviに震央・地震名・断層名・地名を加筆）

Fig.1：Location map of the active faults relevant to the 1586 Tensho Earthquake, and epicenter of the 1596 Keicho Bungo Earthquake and Keicho Fushimi Earthquakes.

2. 阿波の「地割れ」に関する史料

天正地震で生じたとされる「阿波の地割れ」は、『増訂大日本地震史料第1巻』（1941）に収録されている『大日本府縣志』の「天正十二年〇十三年ノ誤ナリ十一月二十九日地大二震シ、年ヲ踰テ止マス、地裂ルコト數所、阿波志」に基づいていると思われる。宇佐実・他（2013）でも「阿波にも地割れを生じたという。」とある。天正地震では、最も西方の震災として大坂・堺で倉庫の倒壊や死亡がフロイス『日本史』（『新収日本地震史料第1巻』（1981））によって記載されている。

一方、大阪と徳島の間位置する淡路島に天正地震の被害は見出されていないようである。徳島市は天正地震で複数活動したといわれている活断層のうち、西端にある養老 - 桑名 - 四日市断層帯から約220km離れている（図1）。

本論では、『増訂大日本地震史料第1巻』で「阿波の地割れ」として参照される『阿波志』以前に記された複数の史料を取り上げ、その記述内容を具体的に検討する。

2.1 検討史料

1815年に成立した『阿波志』以前に阿波周辺諸国で記された史料のうち、地震発生日にもっとも近くに執筆された次の2史料に、天正地震に関連すると考える記述が見られる。一つは1652年（承応元年）の『讃

岐国大日記』(以下、『大日記』と称す)、他の一つは1663年(寛文三年)に記された『南海治乱記』(以下、『治乱記』と称す)で、それぞれ1943年と1913年に刊行されている。そこで、この二つの史料と『阿波志』について、同地震前後の災害に関する記述も加え、著者や文献の背景を古い史料順に紹介する。

2.2 『讃岐国大日記』とその記述内容

『大日記』は、『大日本地震史料 上 卷之四』(1904)に次のように収録されている。

〔讃岐国大日記〕 天正十二年十一月廿九、大地震、越年不止矣、○豊鑑、大日記、愚抄ノ三書、前年ニ掲ゲシハ誤レリ、

『大日記』そのものの評価は、『香川県史第四卷』(1989)で以下のように解題される。

「讃岐の上代から慶安四年(一六五一)までの漢文の編年史。著者は高松石清水八幡宮の祀官友安盛員。(中略)本書の内容は、六国史・万葉集・延喜式・吾妻鏡・太平記など旧記・古書から讃岐の記事を引用するとともに、(中略)伝承や讃岐に関係の深い人物の事績を記す。(中略)室町・戦国は武将の興亡が主であるが、(中略)ついで、仙石・生駒の治世を略記、松平頼重の初政については池数・寺社領高など具体的に述べ(後略)。」

上記の解読には記述されていないが、溝淵(2016)によると『大日記』は友安盛員(1594～1660年)が1652年(承応元年)に著した。

今回閲覧した史料は、国立国会図書館『香川叢書 第二』(1943)に収録された画像データ、国文学研究資料館の高知県立図書館(山内文庫)の画像データ、及び香川県立図書館の画像データ(1748年成立、1774年以降出版)である。香川叢書第二に収録されたものは、同書解題によると、香川県安原村松浦正一氏蔵本を底本として、多和田文庫蔵本、木田郡牟禮村村上正一氏蔵本、高松市八番町丁上原準一氏蔵本と対校している。この3史料を比べると、国会図書館本(各施設の史料を便宜的に“本”と記す)と国文学研究資料館本は、送りがなの一部に多少の相異があるのみで、全く同じ内容である。香川県立図書館本は前2史料より文章がわずかに簡略化されている所があるが、内容に大きな違いはない。国会図書館本は刊本、他2書は写本であるが、ここでは、活字体である国会図書館本を取り上げ、そのまま以下に示す。

【史料1】『讃岐国大日記』[国立国会図書館、『香川叢書 第二』(1943)]

同六年自ニ四月一至ニ九月一雨ル。同七年八月一日、洪水。阿州人民多ク流レ死ス矣。同八年春夏、大疫癘、人民死ス。(中略)同十二年十一月廿九日、大地震越レ年不レ止矣。同十三年卯月、(中略)○慶長元年閏七月十二日之夜、始テ大地震。山崩レ地裂ケ、白水涌出ス。其餘波四五十日不レ止。其ノ時、豊後ノ國府内ノ大地沉 落テ成ニ蒼海一。其ノ方一里有半。

2.3 『南海治乱記』とその記述内容

愛媛県史文学(1984)は『治乱記』を以下のように解題する。

『南海治乱記』(目録一卷十七巻十八冊)は、寛文三年(一六六三)に成立、正徳四年(一七一四)に刊行された。著者香西成資は福岡黒田藩の藩士であるが、本書成立時にはまだ仕官していなかった。刊行は仕官後のことである。彼は刊行後もその増補を続け、『南海通記』二巻を完成する。その氏姓からもわかるように、彼は高松を本拠とする戦国大名香西氏の末裔であった。(中略)本書の大きな

特色の一つである「老父夜話記」(巻一七)は、著者自らがその地において収集したものであって注目すべきものである。(中略)著者は、『六国史』や『吾妻鏡』『平家物語』や『太平記』などは勿論のことであるが、前掲の『元親記』『長元記』等によって記述しているようである。(後略)』

加えて、『四国史料集 第二期戦国史料叢書 5』(山本, 1966)は『治乱記』を次のように解説する。

「本書の著者は香西成資である。成資は讃岐国香西の人で、寛永九年(一六三二)に生まれ、のち本立軒常山と号した。(中略)成資は幼稚の頃から集めた覚書の類を集大成し、自らの意見も加えて二十一巻に及ぶ『南海通記』を著した。(中略)自らの史論を展開した箇所も多くみられ、文章も平易で史料的な読物として興味がある。ただ、所々誤りがみられるが、これは長い年月の経過のため、記憶が薄れていたり、老年のせいであろう。(後略)」

香西成資の没年は解題等書かれておらず不明だが、完成した『南海通記』を享保四年(1719)に白峰寺(香川県坂出市)に直接奉納している(愛媛県史)ことから、少なくとも1719年まで生存していたと思われる。

天正地震を記述した箇所は、「巻之十七乱後編老父夜話記」にある。「老父夜話記」の中で、老父が天正地震とその前後の政治社会情勢を語る。老父は讃岐の土豪三谷氏の末裔である三谷彦兵衛景近である。『治乱記』内の記述によると、三谷は讃岐の人で元亀二年(1571)に生まれ、正保(1645-1648)あたりまで生存したようである。これによると、三谷が15歳の時に天正地震が発生している。

今回、国立国会図書館の香川新報社(1913)の画像データ*5、徳島県立図書館の『南海治乱記』六(呉郷文庫印)の画像データを閲覧した。両史料は記述や内容が全く同じで、国会図書館は刊本、他書は写本であるが、ここでは活字体である国会図書館本を取り上げる。

【史料2】『南海治乱記』[国立国会図書館, 香川新報社(1913)] 三谷彦兵衛語て曰く古を考ふるに水旱の年も六甲の運を以て十年宛も續くものかと思ふ也天正六年の四月より雨ふりて九月まで不止田野に五穀實のらず土民困窮す同七年八月一日より大洪水して阿波國一面の湖水となること三日人民多く死し牛馬數を盡す同八年春より夏に至り疫癘はやりて衆民死亡す(中略)同十年九月五日大洪水して阿波國湖水となる同十二年水損其十一月廿九日より大地震して超年不止山崩大地裂て地中より白水涌出す豊後の府内の邊破裂して海底に沈み林木水底に見る

2.4 『阿波志』とその記述内容

『阿波志』の概要を徳島県立博物館ホームページ(2017)の説明文から抜粋する(和暦の年号の算用数字は原文のまま)。

「『阿波志』は徳島藩儒の佐野山陰(憲)が寛政4年(1792)に藩命を受けて編纂に着手し、文化12年(1815)に完成した藩撰地誌である。佐野は自ら国内を調査したほか、各村・浦・町の役人に命じて、沿革や田畑・租税・戸口・寺社・古跡等の調査や資料の提出をさせ、それらをもとにまとめた。(中略)古文書等の原文の引用はなく、記述は簡略である(後略)。」とある。

今回、国立国会図書館の阿波國文庫印の画像データ、および徳島県立図書館の呉郷文庫印の画像データを閲覧した。両史料は全く同じ記述と内容で、ここでは国会図書館本を取り上げる。天正地震の記述は、全十二巻のうちの巻之一の「災祥」に見られる。

*5 現在の「四国新聞社」に原本の照合を依頼したが、「不明」という回答だった(2018年2月)

表 1：史料にみる天正六年～慶長元年の災害記録の比較

Table1: Comparing of the earthquake in Tensho 6 to Keicho 1, disasters described historical documents

書名	讃岐国大日記	南海治乱記	阿波志
原書成立年	1652年(承応元年)	1663年(寛文三年)	1815年(文化十二年)
参照本	国立国会図書館(『香川叢書』第二, 1943)	国立国会図書館(香川新報社, 1913)	国立国会図書館(1815)
1578年水害	同六年、自二四月一至二九月一雨ル。	天正六年の四月より雨ふりて九月まで不止	(記載なし)
1579年水害	同七年八月一日洪水。阿州人民多ク流レ死ス矣。	同七年八月一日より大洪水して阿波國一面の湖水となること三日人民多く死し牛馬数を盡す	天正七年八月大水不去三日人畜多歿
1580年疫病	同八年春夏、大疫癘、人民死ス。	同八年春より夏に至り疫癘はやりて衆民死亡す	八年春大疫癘病至夏不止
1582年水害	(記載なし)	同十年九月五日大洪水して阿波國湖水となる	十年九月五日大水
1585年水害	(記載なし)	同十二年水損	十二年大水
1586年天正地震	同十二年十一月廿九日、大地震越レ年不レ止矣。	十一月廿九日より大地震して超年不止山崩大地裂て地中より白水涌出す豊後の府内の邊破裂して海底に沈み林木水底に見る	十一月廿九日地大震踰年不止地裂數所
1596年慶長伏見地震	慶長元年閏七月十二日之夜、始テ大地震。山崩レ地裂ケ、白水涌出ス。其餘波四五十日不レ止。斯ノ時、豊後ノ國府内ノ大地沉落テ成ル蒼海ト。其ノ方一里有半。	(慶長年間の地震記載なし)	(慶長年間の地震記載なし)

【史料 3】『阿波志』[国立国会図書館(1815)]

天正七年八月大水不去三日人畜多歿八年春大疫至夏不止

十年九月五日大水十二年大水 十一月廿九日地大震踰年不止地裂數所

3. 史料に記される地震と水害の被害状況

3.1 史料の比較検討

前掲した 3 史料の特徴を明らかにするために、天正地震のみならずその前後、天正六年(1578年)から慶長元年(1596年)に記述される地震と水害、疫病の 7 件について各史料を対比する(表 1)。3 史料をまとめると、この 18 年間に水害 4 件と地震災害 1 件、疫病 1 件が記される。『大日記』は水害 2 件、『治乱記』が地震災害 1 件、『阿波志』が水害と地震災害各 1 件が欠如している。加えて編纂された背景もあり、『大日記』と『治乱記』が讃岐と阿波を、『阿波志』が阿波を中心に発生した被害を記していると考えられる。

3.2 「天正十二年十一月廿九日大地震越年不止」

『大日記』には「十二年(1585年)十一月廿九日大地震越年不止」と簡単に記述される。しかし、これまでの研究からこの年月日に大地震が発生したという報告はなく、1年後の天正十三年十一月廿九日(1586年1月18日)に天正地震が発生している。このような根拠と、余震が「越年不止」も含め、『大日記』に記される「十二年十一月廿九日大地震越年不止」は天正十三年の天正地震に関する記述と考える。

『大日記』に記載されている全地震数は17個で、記述期間内(上代～1651年)の地震は、宇佐美・他(2013)及び古代中世地震史料研究会(2017)が14個、そのうち発生日が異なる地震が3個あり、3個が記述されていない。3個の発生日が異なる地震のうち、2個(天正十二年含む)の年号が1年違い、1個が別の地震と考えられる。これをみると、『大日記』の地震発生日の記述は比較的正確で、天正十二年の地震は引用史料が十二年だった可能性が高い。『大日記』より後に編纂された『治乱記』では、天正十二年地震に「山崩地裂て地中より白水涌出す豊後の府内の邊破裂して海底に沈み林木水底に見る」が、『阿波志』では「地裂數所」が記されている。

3.3 「慶長元年閏七月十二日之夜、始大地震」

『大日記』によると、「慶長元年閏七月十二日之夜、始大地震」と記される。同日に発生の記録がある地震を調べると、慶長豊後地震が挙がる(日本地震学会)。しかし、慶長豊後地震は、閏七月九日とする研究成果が多い[宇佐見・他(2013)、北原・他(2012)など]。讃岐からみると豊後よりも近い近畿で閏七月十三日ながらも慶長伏見地震が発生し、しかも同地震で淡路島や阿波国において地変も報告される[吉岡・他(1997)、小野・他(2015)]。このようなことから『大日記』の閏七月十二日は慶長伏見地震の様子を記したものと考える。

『大日記』は自国(讃岐)での災害については、表1の水害の例で示すように国名を記していないので、十二日夜、始大地震に記される「山崩地裂、白水涌出」は讃岐での出来事と考えられる。この後の「豊後国府内」以下の記述は、慶長豊後地震の豊後での被害状況を記したものであろう。

『大日記』による十二日夜の地震に関する内容を、その11年後に編纂された『治乱記』が何らかの理由により天正地震の出来事として扱い、さらに『治乱記』の152年後に刊行された『阿波志』は、この間成立の他の史料も参照した可能性があるが、天正地震で阿波に地割れが生じたことを記している。

3.4 『治乱記』と『阿波志』の天正地震に関する記述

『治乱記』の現代語訳を行った井伊(1981)によると、著者は子供の頃、老父たち(70-80歳くらい)などから四国の往時を聞き、それを少し後年になってから書き綴り、その資料を他の記録類などと参照して『治乱記』を執筆したようである。『治乱記』では引用図書は古い出来事に限定され、全体として引用図書を示していない。老父は15歳頃に経験もしくは伝聞した天正地震とその10年後、25歳頃に経験もしくは伝聞した慶長伏見地震と慶長豊後地震を何らかの理由により混同したか、著者が老父からの聞き取りを誤写した可能性もあり、『大日記』に記された「山崩地裂・・・一里有半」が天正地震として記されたと考える。

『阿波志』では1579年水害と1580年疫病、1582年水害、1585年水害は、『大日記』よりも『治乱記』の記述に類似し、しかも簡略化されている。1586年天正地震の記述も簡略で、発生日と余震のことは、前2史料と同様だが、被害状況は「地裂數所」のみの記載である。これは、山崩れなどや豊後府内の被災は、他国のことなので記述しなかったと思われる。

『阿波志』では、古い時代の災害は引用図書を示すが、1361年(康安元年)の地震以降に発生した災害につ

いては引用が示されていない。『阿波志』は、天正地震から約 230 年後に編纂されていることから、何らかの史料を参考にしたと考えられる。『阿波志』は 1579 年水害～1585 年水害と同様、文章の類似性から『治乱記』を参考にした可能性が大きい。ただし、その編纂過程での調査から、阿波にその前後の地震で地割れの発生が明らかになり、『治乱記』を参照しながら天正十二年地震として阿波での出来事に「地裂數所」を加筆したことも十分考えられる。

小野・他 (2015) は、1596 年慶長伏見地震の際に、徳島県鳴門市撫養 (むや) 地区が隆起し、塩田開発が可能になったという史料を紹介し、加えて地形・地質調査からも同地区の鳴門南断層の活動が塩田開発の契機となった可能性が高いと指摘する。『阿波志』に記される「地裂數所」の地点は不明だが、慶長伏見地震による地殻の隆起が生じたなら、「地裂」は慶長元年の地震に関係する出来事とも考えられる。

4. 「阿波の地割れ」が天正地震で発生したか

最初に、史料の編纂の歴史を追ってみる。『大日記』は、天正十二年 (十三年) 地震と慶長元年地震の発生日や地震状況を明瞭に区別して記述している。『大日記』成立の 11 年後に編纂された『治乱記』は、『大日記』の慶長元年の地震に関する記述がほぼ同内容で天正十二年の地震に記され、慶長元年の地震は記述されていない。『治乱記』から 152 年後に編纂された『阿波志』では、『治乱記』に記された天正十二年の地震を簡略化し、慶長元年の地震については『治乱記』同様に記述されない。

次に、断片的な内容になるが、江戸時代に編纂された四国地方における他の史料からも検討する。讃岐国一宮の田代神社 (高松市一宮町) の記録である『讃岐一宮盛衰記』(1717) に以下の記述がある。

【史料 4】『讃岐一宮盛衰記』[国立国会図書館『香川叢書第壺』(1939)]

文禄五年七月十二日、大地震アリ。月ヲ逾テ不レ止。是ニ依テ本社・攝社・末社・塔・佛閣ニ至マテ盡零落ス。

史料 4 には文禄五年の慶長伏見地震と考えられる記述はあっても、天正十二年 (十三年) の地震についての記述は見当たらない。本書は所々に『治乱記』を引用して田代神社での過去の出来事を記しており、著者が「治乱記」全体に目を通していたことは十分想像され、地震の記述も承知していたと思われる。にも関わらず、天正十二年地震の記述がないのは、この地震で讃岐に目立つような被害や現象がなかったために記述しなかったと考える。その一方、文禄五年の地震は自社の被害を記録した書物を参考にしたか、伝承を元にして記述したのであろう。

次に、讃岐の編年史と地誌を記した『翁嫗夜話』(おうやわ)(別名『讃州府誌』1745) を検討する。同書には巻頭の凡例に『大日記』の名がある。天正十二年の地震の記述は見つからないが、巻之一に慶長元年の地震のことを『大日記』よりやや簡略化して次のように記す。

【史料 5】『翁嫗夜話』[香川県立図書館]

慶長元年秋閏七月十二日夜地震山崩地裂踰月而止豊後府内地陥為海方里許

この二書に共通するのは、慶長元年の地震で讃岐や豊後で顕著な被害が生じていることである。その一方で、天正の地震については記述されていない。

以上の検討の結果、天正地震に関する阿波国での地変に関しては否定的な内容となった。その反面、慶長伏見地震で讃岐国において「山崩地裂、白水涌出」という地変や讃岐一宮に被害が生じたと言える。しかも、徳島県鳴門市では海岸付近の隆起が指摘され、同地震によって阿波国でも地変が発生したとみられる。

「山崩地裂、白水涌出・・・」に続く「府内大地沉落成蒼海。其ノ方一里有半」とは、慶長豊後地震での大分県の地変と考えられ、伏見地震と発生日が極めて近かったために、慶長元年閏七月十二日の夜に起こった地震に関係する出来事として記述されたと考える。

5. 結論

これまでの研究では、天正地震で震源の一つと推定されている養老 - 桑名 - 四日市断層帯から約 220km も離れる阿波国で「地裂数所」と記す『阿波志』を引用し、現在の徳島県にも地変が生じたと考えられてきた。今回、『阿波志』よりも古い史料である『讃岐国大日記』を調べると、同書で記された天正地震と考えられる天正十二年の地震では地変の記述がなく、慶長の伏見地震・豊後地震と考えられる慶長元年の地震について、讃岐国での「山崩地裂、白水涌出」と豊後府内での「大地沉落成蒼海」が記されていた。

『讃岐国大日記』から 11 年後に編纂された『南海治乱記』では、『讃岐国大日記』で記された慶長元年の地震が何らかの理由により天正十二年の地震としてまとめられ、この天正十二年の地震は地震の約 230 年後に編纂された『阿波志』で「地裂数所」と記述された。これを『増訂大日本地震史料第 1 巻』(1941) が所収したことから、天正地震で「阿波国で地割れ」と考えられるようになったと推論される。

本稿では参考にした史料の成立過程や信憑性などの詳細な検討が十分でなく、まだ検討すべき資料などを残すが、『阿波志』が記述した地割れの内容の再検討が必要なることを示した。本稿が今後の研究に貢献すれば幸いである。

参考文献

1. 愛媛県生涯学習センター, 愛媛県史文学 (1984), (閲覧日 2017 年 6 月 20 日).
2. 伊井春樹, 1981, 教育社新書|原本現代訳;25, 南海治乱記 (上), (株) 教育社, 26pp.
3. 飯田波事, 1987, 天正大地震誌, 名古屋大学出版会, 80-147.
4. 香川県, 1745, 南海治乱記翁媪夜話巻之一, 香川県立図書館デジタルライブラリー.
5. 香川県, 1939, 香川叢書第壹, 讃岐一宮盛衰記, 国立国会図書館デジタルコレクション, 206pp.
6. 香川県, 1943, 香川叢書 第二, 讃岐国大日記, 国立国会図書館デジタルコレクション, 513-514.
7. 香川県, 1989, 香川県史第四巻, 通史編近世 II, 719-720.
8. 香川新報社 (行), 1913, 南海治乱記, 国立国会図書館デジタルコレクション, 12-15.
9. 北原糸子・松浦律子・木村玲欧, 2012, 日本歴史災害事典, (株) 吉川弘文館, 189-190.
10. 古代中世地震史料研究会, [古代・中世] 地震・噴火史料データベース (β版), [http:// sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/](http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/)(最終更新日 2017.3.15).
11. 松浦律子, 2011, 天正地震の震源域特定: 史料情報の詳細検討による最新成果, 活断層研究 35 号, 29-39.
12. 溝淵利博, 2016, 香川県郷土教育史研究序説 (一), 研究紀要第 64・65 合併号, 高松大学, 高松短期大学, 185pp.
13. 文部省震災予防評議会, 1941, 増訂大日本地震史料, 第 1 巻, 573-574, 590pp.
14. 日本地震学会, 日本付近のおもな被害地震年代表, <http://www.zisin.jp/>. (閲覧日:2017 年 7 月 25 日)
15. 小野映介・矢田俊文・海津颯・河角龍典, 2015, 徳島県撫養地区における塩田開発と 1596 年慶長伏見地震の関連性, 2015 年度日本地理学会春季学術大会発表要旨集, 131pp. <https://www.jsage.jst.go.jp/article/ajg/2015s/0/2015s100029/pdf>.
16. 佐野山陰, 1815, 阿波志 (阿波國文庫), 国立国会図書館デジタルコレクション.
17. 震災予防調査会, 1904, 大日本地震史料 上 巻之四, 184pp.
18. 徳島県立博物館, 阿波志 (テキストデータ版) <http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/hasegawa/shiryou/awashi.html>(最終更新日 2017.6.29)
19. 東京大学地震研究所 (編), 1981, 新収日本地震史料, 第 1 巻, 138pp.
20. 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 55-57.
21. 山本 大 (校注), 1966, 四国史料集, 第二期戦国史料叢書 5, (株) 人物往来社, 396pp.
22. 吉岡敏和・水野清秀・榊原信夫, 1997, 淡路島中部, 先山断層の最新活動とその意義, 活断層研究 16 号, 87-94.